観世流

Kanzeryu Noh-Theatre

緑泉会

Ryokusenkai

能……葛城 大和舞 Kazuraki yamatomai……墨 敬子

狂言……成上り Nariagori……三宅 右近

能……船辨慶 前後之替 Funabenkei zengonokae……津村禮次郎

『船辨慶』シテ：津村禮次郎（撮影：左／森田拾史郎　上／三上文規）

平成29年　第4回例会

12.2［土］PM 1:00～（開場12:00）

喜多六平太記念能楽堂

十寸髪 *masukami*

第4回例会

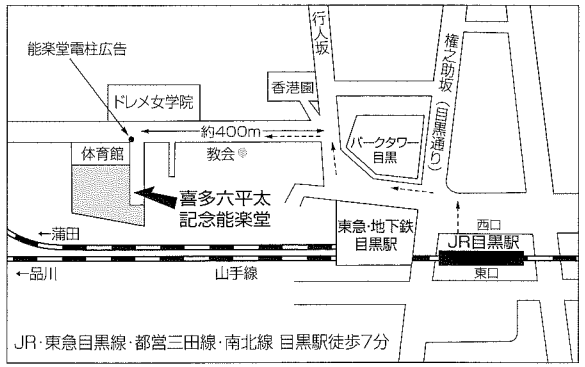
2017. 12.2 [土] PM1:00（開場12:00）

喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 品川区上大崎4-6-9　TEL 03-3491-8813

JR、東急目黒線、地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩7分。
香港園手前の道を左折し約400m直進、杉野学園体育館手前を左に入る。

※駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮下さい。



●入場料

会員券（年4回）……一般 20,000円　学生 10,000円
1回券（当日券）……一般 6,000円　学生 3,000円

●申込先：各出演能楽師または緑泉会まで

墨　敬子　TEL•FAX 045-544-6787
津村禮次郎　TEL 042-386-2131　FAX 042-386-2132

緑泉会　〒184-0005 東京都小金井市桜町2-7-18
tel. 042-386-2131　fax. 042-386-2132

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。
演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場合によっては退場頂く事もございますのでご了承下さい。

平成二十九年 第四回 例会 番組

能　葛城

里女 葛城ノ神　墨　敬子
大和舞　山伏　大日方　寛
山伏　則久　英志
山伏　御厨　誠吾
里人　三宅　近成
後見　永島　充　津村禮次郎
地謡　新井麻衣子　菅野　貞男　吉留　敬高　坂　真太郎　杉澤　陽子　奥川　恒治　中所　宜夫　鈴木　啓吾
大鼓　大倉慶乃助
小鼓　岡本はる奈
太鼓　梶谷　英樹
笛　八反田智子

【休憩 十五分】

狂言　成上り

太郎冠者　三宅　右近
主　高澤　祐介
すっぱ　金田　弘明

仕舞　浮舟

自然居士　鄞之段　永島　充　奥川　恒治

地謡　河井　美紀　鈴木　啓吾　中所　宜夫　坂　真太郎

【休憩 十分】

能　船辨慶

源義経　青山　昂生
静御前 知盛ノ怨霊　津村禮次郎
前後之替　辨慶　福王　和幸
従者　矢野　昌平
従者　村瀬　提
船頭　三宅　右矩
小鼓　飯冨　孔明
大鼓　柿原　孝則
太鼓　大川　典良
笛　寺井　宏明

附祝言

後見　新井麻衣子　中所　宜夫
地謡　中所　真吾　河井　美紀　藤村　答　坂　真太郎　杉澤　陽子　鈴木　啓吾　奥川　恒治　永島　充

【終了予定　午後四時半頃】

能――**葛城** 大和舞（かづらき　やまとまい）

出羽国・羽黒山の山伏（ワキ）の一行が大和国・葛城山にやってくる。折からの大雪に降り込められていると、この山に住む女（前シテ）が現れて、自分の庵で一夜を明かすようにと案内する。そして古歌にも詠まれた楚樹（しもと＝細い木を束ねたもの）を焚いてもてなす。山伏が勤行を始めようとすると、女は三熱の苦しみから救って欲しいと頼む。自分は大峰までの岩橋を架ける命を果たせず、不動明王に戒めを受ける葛城の神であると明かし、姿を消す。（中入）

山伏が祈っていると、葛城の女神（後シテ）が現れ、格調高く舞を舞う。月下の銀世界の中、醜い容貌を恥じた女神は、夜が明ける前にと、岩戸の中に姿を消す。

「大和舞」の小書が付くと、雪山の作り物を出し、前後ともシテの装束が変わる。視覚的に雪山を想起しやすく、何より後場の舞が通常の〔序之舞〕から〔神楽〕に替わり、天岩戸の前で舞われた神楽「大和舞」を模したものとなる。

狂言――**成上り**（なりあがり）

主人が太郎冠者に太刀を持たせて初寅参りに鞍馬へ参詣に行ったときのこと。太郎冠者がお堂で寝ていると、その隙にすっぱが現れ、太刀を竹の棒にすりかえてしまう。すりかえられたことに気付き驚いた太郎冠者は、珍しい話を聞きましたと言いながら主人に成上りの話をしてごまかそうとする。そのうちにすっぱが現れ、主人は太郎冠者に捕えるよう命じるが…。

仕舞――

浮舟（うきふね）…源氏物語の掉尾を飾る、薫と匂宮に翻弄される浮舟の霊は、死後もさまよい苦しんでいたが、旅の僧の供養のおかげで執心も晴れ、成仏できることを喜び、横川の杉の梢に消えていく。

自然居士　鄞之段（じねんこじ　さきらのだん）…人商人から少女を救おうとする自然居士。鄞を擦ったり鞨鼓を打ったりと芸尽くしに舞い、ついには少女を取り戻して都に帰っていく。

能――**船辨慶** 前後之替（ふなべんけい　ぜんごのかえ）

平家を滅ぼした後、兄の源頼朝と不仲になった源義経（子方）は、嫌疑を晴らすべく西国落ちを決意する。摂津国尼崎大物浦に到着し、いよいよ船出となった時、弁慶（ワキ）のすすめを受け入れて静御前を都へ帰すことにする。弁慶は静の宿を訪ねてこの由を伝えるが、静（前シテ）は弁慶の一存で来たものと誤解し、義経に直訴する。しかし義経からも重ねて都へ帰るよう伝えられ、心沈む静。別離にあたり、春秋時代に越王勾踐を助けて功を上げた陶朱公の故事を語りつつ、義経の無事を祈り舞を舞う。最後に、烏帽子を脱ぎ捨てて帰って行く静が哀れを誘う。（中入）

義経一行が船出すると俄かに風が荒れ始め、平知盛（後シテ）を始めとする平家の怨霊たちが波間に現れる。一行を海に沈めようと襲い掛かってくるが、弁慶の五大明王に祈る力によって次第に遠ざけられ、白波の間に姿を消す。

前シテの優美な舞と、後シテの豪快な長刀さばき。全く異なる人物を一人のシテが演じて、前後の対比が鮮やかな曲。小書「前後之替」は、前後段に特別の型をあしらい、人気の高い演出となっている。

●平成30年第1回例会……2月4日（日）

能……胡蝶……新井麻衣子
能……櫻川……桑田　貴志